

昭和
和
四
十
五
年

七
月
二
十
五
日

第
三
種
郵
便
物
認
可
行
(毎月一回・十五日発行)

(通第二五八号)

慈

光

第二十二卷

第十一号

次

仏陀の真実……………近角常観……………(1)

前田清次郎さんを憶う……………柳瀬留治……………(5)

人生の生き甲斐……………和才誠司……………(8)

随感その折りく……………玉尾延忠……………(10)

ささやかな体験を通して……………松本解雄……………(14)

わが信を語る

晩年の池山先生……………花田正夫……………(19)

目

仏陀の眞実

近角常観

「仏とは如何なる方である、仏の力とは如何なるものである」と尋ねられたときは、唯なんのことはない。仏とは慈悲な方である。眞実の塊（かたまり）である。又その御力で私を救うて下さる。又常々私の汚れを照して下されて、言うにいわれぬ慰安を与えて下さる、というより外に言いようはない。

世にもし仏がましまさずば世間はたしかに暗闇である。世にもし仏がましまさずば実に殺風景のきわみであろう。私はこの仏の救いにあずからずばとても今日あることが出来ぬのである。又今日生きている甲斐もなきことである。世間が四方八面闇黒になつても、その中に細々ながらも光が輝き、如何に激しき風雨があつても、その間に言うにいわれぬ暖かき御慈悲が身にしみこむ心地がする。仏の誓いも、仏の力も、ひしひしと適切に感ぜらるる。

親鸞聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」と述べたまいたるも、他人の事を

言われたとはとても思えない。かく仏の慈悲につかまれ、光明に照らされたとして、私が決して他人にくらべて立派な行いが出来るとはすこしも思わない。されど、もしこの仏に遇い奉らずば如何に失敗したかもしれぬとは、たしかに信ずることである。未灯抄十九に、

「おの／＼の昔は弥陀のちかいをしらず、阿弥陀仏をも申さずおわしまし候いしが、釈迦弥陀の御方便にもよおされて、いま弥陀のちかいを聞きはじめておわします身にて候なり。もとは無明の酒に酔いふして、食欲・瞋恚・愚痴の三毒のみこのみめしおうて候いつるに、仏のちかいをききはじめしより、無明の酔もようようすこしづつさめ、三毒をもすこしづつこのまずして、阿弥陀仏のくすりを、つねにこのみめす身となりて、おわしましおうて候ぞかし」とは、一言一句こころにしみて有難き教えである。

全体人間が真面目に自己をかえりみる心がなるときは、精神上の問題に向つて入るべき門戸はない。そして奥深く考えれば考えるほど、内心の穢（けが）らわしく、底暗く怒り易きことが分つてくる。そもそも「汝自身を知れ」と

の古き教えを適切に味わうほど自己は立派でないことがわかつてくる。仏陀が我々の内心を解剖して、食欲・瞋恚・愚痴の三毒とせられたが、実に実験上あらそわれぬことである。我々は、我々の本体が何であるか、靈魂があるかなきか、すべてわからぬが、唯自分が三毒のかたまりであることだけは明らかである。罪惡のかたまりであることは一点疑うべき余地を見出さない。

仏教はこの根本に向つて開かれたる門戸である。仏が布施すなわち慈善の行をおすすめる。それについて、若しこの値あるものをかの人の利益のために我が与えるのじやと思ふならば、何のためにもならぬ。ただこれをおしげもなく与える心持がよいのである。故に布施の行をすれば食欲の煩惱がなくなるのである。仏が忍辱（にんにく）即ち忍耐の行をおすすめる。自分は腹が立てども先ず人をゆるしてやるのであると思ふならば、何のためにもならぬ。人を許してやるのでない、腹立つことをつまらぬことを自覚するようにならなければならぬ。故に忍辱の行をすれば、瞋恚の煩惱がなくなるのである。仏が善をなせよと教えられる。善そのものに執着してはいかぬ。善をなすは我々の心の無明をなくすためである。八万四千の門戸の開かれたは、八万四千の煩惱があるからである。門を叩かぬものには開かれぬ。自己が煩惱の塊（かたまり）であるこ

とを自覚せぬ者には救済の門戸は永久に鎖ざされてある。

親鸞聖人は実にこの人間の弱点を自覚せられたる方である。「一切の凡小、一切時中に、貪愛の心つねによく善心をけがし、瞋憎の心つねによく法財を焼く。急作急修して頭燃（すねん）を払うが如くすれども、すべて雑毒雑修の善となづく、また虚偽諂偽（こけてんぎ）の行となづく、眞実の業となづけざるなり」とは、実に氣持の悪しきまで我々の弱点を看破せられたように感ずる。平生こころを清浄に持たたい、人のためになることはすこしもおしげなく尽したいと思つてはいるものの、とかく穢（けが）き心が起り、知らず識らずの間に、骨おしみをしたり、気がつかぬ間に自分という考えがまじり易い。また平生なるべく、少しでも善いことをしたいと心掛け、人に対してもすこぶる満足な心持になつて、そぞろに仏の恵みを喜んでおる心の下に突然として怒りの心を起こして、今まで積んだ功德の法財を一時に焼き滅して、後から考えてみて、自らあきれることがある。どれ程我慢をして頭に火がついたようにつとめたところで、純粹な眞実の心になれぬ、まじりものである、毒だらけである。結局虚偽（こけ）である、詭偽（へてんぎ）である。人間の力で眞実などはとてもとて及ばぬ。善らしきものは、善を飾った偽善である。とかく、人間がわれは善人であるとか、清浄であるとか思ふべきでない。

一枚皮をめぐれば、腹の中はけがらわしき、汚き、黒き、怖るべきものが大騒動しておるのではないか。「外に賢善精進の相を現するを得ざれ、中に虚仮を懐けばなり。貪瞋・邪偽・奸詐（かんざ）百端（ももはし）にして、悪性やめがたし、事蛇蝎に同じ」とは、我々に対する骨身に徹する打撃である。

ここまでおしつまってくれば仏にすがるより外はない。唯仏の眞実を仰ぐより外はない。いわゆる

「一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虚仮詭偽にして眞実の心なし。ここをもって、如来一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひし時、三業（身口意）の所修、一念一刹那も清淨ならざることなし、眞心ならざることなし」

である。実にこれが仏の仏たる点である。經文には、この仏の眞実をあらわして「欲寛・瞋寛・害寛を生ぜず。欲想・瞋想・害想を起さず」とあるが、実に我々が弱点の根本たる三毒の正反対に立って、清淨の行を以て酬いて下さるのである。我々はとかく欲心が起り勝ちであるのに、仏は少欲知足である。我々は眼に角を立て易いのに、仏は和顔愛語である。我々は龍言（そごん）を吐いて自ら害し、彼を害し、彼も此も共に害しつつかあるのに、仏は善語を下

らぬにいよいよ毒を勧めんが如し。〃藥あり、毒をこのめ〃と候うらんことはあるべくも候わずとこそおぼえ候ふの御名をもきき、念仏を申して久しくなりて在しまさ人々々は、後世の悪しきことを厭うしるし、この身の悪しきことをば厭い捨てんと思召すしるしも候うべしとこそおぼえ候え。はじめて仏の誓いを聞き初むる人々の、わが身の悪く心の悪きを思い知りて〃この身のようにては何ぞ往生せんずる〃という人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わが〃善惡をば沙汰せず迎えたもうぞ〃とは申し候え。かく聞きてのち、仏を信ぜんと思ふ心深くなりぬるには、まことにこの身をも厭い、流転せんことを悲しみて、深く誓いをも信じ阿弥陀仏をも好み申しなどする人は〃もとも心のままにて惡事をも振舞いなんどせじ〃と思召しあわせたまわばこそ、世を厭うしるしにて候わめ。また往生の信心は釈迦弥陀の御勧めによりておこるところを見て候えば、さりとまもことの信心おこらせたまいなんには、いかが昔の御心のままにては候うべき」

と、仏のまことの心の宿りたる聖人の人格と信仰とがあり、ありとあらわれて、実に渴仰に堪えられぬ。

（信仰余瀝第二十頂）

したまいて、自ら利し、人をも利し、人も我もともに利することを修習し給うたのである。我々が三業における弱点たる病に對して、仏はあたかも適當なる藥である。我々はこの仏の眞実なる藥を用いるより外に仕方はない。

「一切の衆生の身口意業の所修の解行（げぎよう）、必ず眞実心の中に作り給いしをもちいよ」

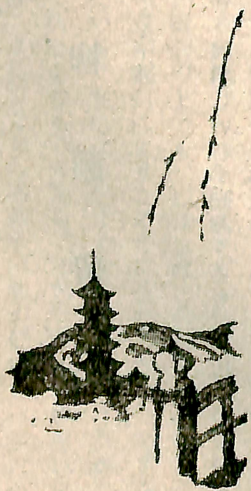
とは、実に我々が救済の極所である。ここにいたって一点の私はない、全く仏陀の眞実が我々の胸の中に宿って下されて言うに言われぬ樂の境界がある。

かくなりたる以上は、吾人は滿身感謝の情に満たされつつ、出来得る限りは身も心も謹み、出来得る限りは仏陀の慈愛を伝え、仏陀の御心が世の中にあらわゆるようにつとめねばならぬ。なるべく慈善もなすべきである、經營もなすべきである、一分だけでも行うのが報謝である、一歩一歩つつしむのが修養である。一刻一刻、仏の眞実を鏡として我々の罪惡を懺悔すべきである。少々、長いけれど親鸞聖人の説めを引きて我々の座右にそなえよう。曰く、

「煩惱具足の身なればとて、心にまかせて身にもすまじきことをも許し、口にも言うまじきことをも許し、ころにも思うまじき事をも許して、いかに心も儘にてあるべしと申しおうて候らんこそ、返す／＼不便におぼえ候え。酔もさめやらぬさきになお酒を勧め、毒も消えや

徒然草（七十四段）

蟻のごとくにあつまりて東西にいそぎ南北にはしる。高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり。行く所あり、帰る家あり。夕にいねて、朝におく。いとむとむと何事ぞや。生をむさぼり利をもとめてやむ時なし。身を養いて何事をかまつ。期する所、ただ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間にとどまらず。これをまつあいだ、何のたのしみかあらん。まどえるものはこれをおそれず、名利におぼれて先途の近き事をかえりみねばなり。おろかなる人は、またこれを悲しむ。常住ならんことをおもいて変化の理をしらねばなり。



前田清次郎さんを憶う

柳 瀬 留 治

今はすでに故人になられた、横浜の前田清次郎さんは著しい人であった。大正五六年頃であったろうか、求道学会を訪ねた前田さんは、横浜の別院で何十年も聴聞して世間からは立派な同行としてほめられていたが、近角先生に向って聞き覚えのお領解を長々とべたのである。ところが先生は、あなたの話にはお慈悲がぬけていると言答えられたのである。自分では立派な信者と思っていたのに、先生から一本やられて、腹を立てて帰ったのであるが、それからというものは心が落着かず、とうとう今までの信心は崩れて了うたのである。

それで日曜講話を聞きに来られ、講話の後で先生が質問のある方に一時間ばかりねんごろにこたえられた。その席で前田さんの問われた事は、はっきり記憶せぬがそれは、

「信仰が判るの喜べる~~×~~のというのは、そです。こちらは喜べぬ、浅ましいだけです。永らく別院で色々の方から聴聞して来たが、ちっとも有難くならず、やがて仏に逆う心が起り、仏壇を踏みこわして縄でふん縛って、外

だけにその浅ましいおのれに注がれる仏のみ心の何と深きことかと、毎日曜の御講話ごとに涙をこぼしてお喜びになる姿が今なお目に見えてくるのである。

さて、この前田さんには子供がなかった。或朝、仏前で動行していられると、近所で赤子の泣く声がある。急にその児が可愛く、我が子の様な気がし、遂にその子を跡継ぎに貰う約束を両親にした（それが大震災の頃であった）

大正十二年の関東の大震災は特に横浜は烈しく、突如と起った上下動で、殆んどの家は倒れ、火と化し、大地が割れて水を噴き出した。前田老夫婦は別れ／＼に遁げ、それから前田さんは、毎日、日夜声を酒らして奥さんを探し死骸なりとも一目でも見たいと、川に浮ぶ死骸、路傍に焼けたトタンをかぶせてある死骸をのがさず見て歩かれたがとう／＼それきり行方がわからず仕舞であった。

立退き先へ私が見舞に行つた時、
「かゝる宿業を持つにつけて一入仏の深い御あわれみがある有難い」と念仏を称えていられた。

二
やがて前田さんの貰った子供の太郎さんが長じたが、たち余りよくなく、金使いが荒く、そのために前田老人はよけい可哀想でたまらないのである。前田さんもひどく老いて脚が悪くなったが、それでも日曜日には必ず求道会館

へ放った……」

先生は

「いかにどう浅ましい心が起ろうとも、起れば起る程あわれで捨てられぬ、それが仏のみこころである」

としきりに説かれるが、前田さんは自分のそした「仏が判らず浅ましいだけ」が金城鉄壁の信仰の如く抗弁して先生の仰せを寄せつけないのである。その時先生は、

「君は何しに此処に来たのか。こちらの話を聞きに来たのではないか。さきから自分のことばかり述べたて、わしの言うことを聞かぬ。黙りなさい！君の言うのは胸の暗ばかりだ。光はわしの言う話にあるのだ。顔をあげてこちらを見なさい。仏天の光明がこちらにあるのだ」

と、先生は卓を叩いて大喝された。驚いて見上げると、先生は満面朱を注いだお顔で仁王立ちしていられる。誠に仏の忿怒相そのものである。強の者、前田さんも口を封じられ、驚きをもって聞き始められた。それが機となり、たちまちにして濁悪のおれをかくも哀み給う大悲でましましたかと感泣されるにいたったのである。烈しく反抗された

に来るのである。そのうちに途中車にはねられてひどい怪我をし、其後あまり顔を見なくなり、やがて床につくようになった。

身持のよくない太郎さんが可哀想でたまらず、或時、

「私の命も永くない。わしは仏様のお慈悲一っで死ぬ。

わしが死ぬと、又お前は金に困るであろう。だが、ちっとも心配するな。わしは仏の恵みから還相廻向によってかならずこの世に生れ変わって来る、そしてお前に金で苦勞させない、さらさら心配するな」

と、太郎さんに言われた由である。そして遂に世を去られた。

やがて太郎さんはどうしたことかから気付いたものか、この深い心の一言から仏の慈悲に気付き、念仏を喜ぶ人となり、前田老人の後を葬らい、一方事業の上でも成功して立派な人物となり、横浜市会議員ともなり、又、常音先生のお話を聞きに来られるという有様であった。

常音先生が講話の上でも、しばしばこの話をなされたことである。「還相廻向によりこの世に生れて来て、必ずお前をまもってやる、金には心配するな」には思わず涙がこぼれる、全く仏心そのものである。如何なる出来の悪い人でもこの一言には仏心知らされるにちがいない。

自分が本当に浅間しいとか、悪いと判るのは仏心に遇ってはじめて感じるので、お前そんな心をもっていて悪いと思わぬのかと、攻め立てても、一応は悪いと思うものの、本当に悪かったと頭の下るものではなく、救いとられてはじめて、かかる者をいつくしみ給うかと、身の浅間しいことが判るのである。

われわれは矢張り生物で、本能的に己を守ろうとする。

これは体の細胞から、脳の組織までが、己を防衛し、悪くても肯定しようとさすのでないであろうか。でも「往生のために人を千人殺せ」といわれると、それも出来ぬ人間である。私も何か悪いことをしてのっぴきならなくなると信仰に気付くだろうと思つたことがあつたが、あながち別に悪事や、やり損ないせずとも、真面目に生きようとすれば誰しも自分の欠陥や性癖に気付き、直そうとしてもどうにもならず、これが自分の病根であり、業だということに気付き「そくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願」に頭が下るのである。

昭和の初め頃であろうか、求道会館の夏季求道会に、藤川さんとか申す軍医さん御夫婦が遠くから聞きに来られた。その奥さんは非常に温和な、のんびりした方で、先生が汗を流して話され、聞く人々も真剣に聞いている席上、しばしば居眠りをしていられるのを見受けた。

人生の生き甲斐

このごろ社会問題として、老人の生き甲斐につき、取沙汰せられるようになった。生き甲斐は老人にかぎったことではないが、老いの身には、身近かに、切実に生きる喜びが感ぜられる。

人間が如何に生きてらよいか、如何にして生きて行くべきかは、昔から論ぜられ、何人も考えている問題であるが、いまだ解決の妙案がない。

先ず順序として、如何に生くべきかの前に、私は如何なるものであるか、また現在如何なる場に立っているかを、よくかえりみるべきである。私は罪惡深重なものである、煩惱具足の凡夫、喜ぶべきことを喜ばぬ、縁に触れると如何なる悪業をも敢えてする、如何とも度しがたい、してみようなきものである。

かかる独り立ちできぬものには、如何にして生くべきかを考える資格、否能力がない。

またこの弱い私は、常に愛欲名利の十字街頭に立たされ事の次第によりては、愛が憎みに転じ、得意が失意ともなる、死にたいと思つても死ぬことができず、生きたいと思

後で、常音先生から聞くと、その方は、「どうも私は呑気で真剣になれぬ性分で真に困ります」と先生に訴えられ、先生は即座に、

「そういうわが身の一大事にも真剣になれぬ性分、そして性分は一生それ仕舞です。それで終るあなたを御覧になる仏は、可哀想で見捨てられないのです」と申されると、立所に、

「何と有難い仰せでしょう」

とおよろこびになった由である。

また、他の方で何一っ不自由なく幸福すぎるので、これではどうしたものかと、仏のお慈悲を聞き、安心されたお人も聞いたことである。

心の和かな人も、善人も、心が薄泥（どぶどろ）の様に汚いと悩む人も、又幸福で富み榮えている人も、それが業で、何かの業を持たぬ人は恐らく人間に唯一人ないことであろう。業（ごう）を持つ以上、仏の御恵みに遇えると思ふのである。撰取不捨の大悲のまします以上、必ず救われるであろうことは、疑いがないと思ふのである。

（人生随想、後篇より）

和誠司才

つても死なねばならぬ。実のところ、私が生きていくのでなく、全く生かされていくのである。

だから、人間が生きて行くには、仏の智慧と慈悲を仰ぐのみであると、祖師聖人は仰せられた。無明の私には智慧の光明、煩惱の私には慈悲の救済、人生この外に道はない問題は、私が如何にして生きて行くべきかでない、如何にして仏を信ずる身にして頂けるかである。

仏の智慧と慈悲を仰ぐことによって、人生のすべてが解決せられるのである。私の人生は、この智慧と慈悲なくしては成り立たぬ。

祖師聖人は歎異鈔に

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

と仰せられ、その結果については

「本願を信じ念仏をもうさば仏になる」

と、私の行き先を、阿弥陀仏がお定め下されてある。

斯くの如く私には、生きて行く方法、乃至その結果を見定める能力もなければ、その必要もない。

もし私が、財産とか、地位とか、名誉とかを志し、間違つてその目的を達し得たとして如何。名利には必ず悩みをもとなりから、名利を獲得すると同時に、食欲の私は、その悩みをまぬかれぬ。人生の真の目的が名利でないことはこの通り明白な事実である。

名利は人を迷わすものにて、人生の真の目的ではない。人生の究極は迷いを離れたさとりの世界、仏になることである。

人間が仏になる、私が仏になる、人生これ以上のよろこびはない。

この仕合わせが信の一念に得られることは、智慧と慈悲の賜にて、言葉にて云いあらわし得ぬ喜びである。

歎異鈔十六章に

「信心さだまりなば、往生は弥陀にはからわれまいらせ
てすることなれば、わがはからいなるべからず。わろか
らんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自
然のことわりにて柔和忍辱（にゆうわにんにく）のここ
ろもいでくべし。すべて、よろずのことにつけて、往生
にはかしこきおもいを具せずして、ただほれほれと弥陀
の御恩の深重なること、つねにおもいだしまいらすべし

随想その折り折り

(医) 玉尾延忠

一、長壽の秘訣

注射をしながら、ある老人との対話がひととき続いた。

「うちの方でも、もう大分死んでしもうた」

「同年輩のお年寄がなあ」

「いや、わしよりわかい太助はんも、一つ年上の亀吉つあんも……どこぞが一寸わるうなると、すぐもう、

もと（死因）になるんじやないかと案じる」

「あんたなんぼじやったかな？」

「来年、ちようどじゃ、かぞえの八十に」

「そりや結構なこと！ 幸せじゃ」

「なんぼ年寄つても、先生、死にとうないけんのか！」

又、あるおばあさんが言った。

「先生、エ注射しておくれよ。いつでも、じぎ治らんじやきに。わしや、生きられるだけ生きたいんじやきに！」と。

この話を先の老人に話すと、

「誰じやって死にとうない、生きられるだけ生きたい。それが本音じゃ。」

しかれば念仏ももうそれさうろう、これ自然なり、わがはからわざるを自然とはもうすなり、これすなわち他力にてまします。しかるを自然といふことの別にあるように、われものしりがおにいうひとのさうろうよしうけたまわる、あさましくさうろう」

と、大慈大悲をすなおにいたたくようさ示れてある。

思わねばならぬことは思わず思はぬでよいことを思う。云わねばならぬことは云わず云わぬでよいことを云う。

行わねばならぬことは行わず行わぬでよいことを行う。わが身を守ることは忘れぬが他人のことは忘れる。

他人に同情を求めるが他人には同情せぬ。他人に反省を求めるが自己は反省せぬ。

斯く挙げれば際限がないが、この如く欠点ばかりの私が罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための御本願により、悪を転じて善と成し、不断煩惱得涅槃の妙果をいただき、浅間しき日常生活の上に、人間の生き甲斐、よろこびを味わい生かされている

さてもくようこそく

南無阿弥陀仏 (四五、九、二十六日稿了)

そうかて、△わしや、死ぬまで生きとると思ふとるんじや△と云う人もあるし」

と顔をほころびせた。即座に、

「それにちがいない。そんな気になれたら、いつでも、そんな気持で日送りしたら長生きしまっせ」

相槌を打って立ちあがった。

「命みじかければ天下四海の富を得ても益なし、財（たから）の山を前につんでも用なし。されば道にしたがひ身をたもちて、長命なるほど大いなる福（さいわい）なし。故に寿（いのちながき）は尚書に五福の第一とすこれ万福の根本なり」

具原益軒の『養生訓』総論からすこし抜書したが、以下養生の術、長壽する法等々を詳しく論ぜられていて、古今東西に通ずる不老長生の名著といつてよいだろう。

このころ誰でも口にするストレス学説の提唱者、ハンス・セリエ教授も、この『養生訓』にすこく共鳴して、その要訣の一字「畏る」を英訳して「 Deinjonjaras」と書き座右の壁に掲げているとのことである。

「畏」ということは、「いつも警報（前兆）に気を付けて、用心し心配しないこと、心配しないで用心するよう」に」と私が常に、高血圧等の患者さんに繰返していることと同意義だろう。

いたはらねばならぬ年令と知らされて沁々と夫の白き髪を見る

老いつける夫いたはらむと語り合ふ吾らをつつみ青葉吹く風

『長生きは芸術である』と言った人がある。長生きするには相当高度な創意と工夫が要するということだろう。長寿を保っている人の風貌は、立派な、生きた芸術品のような香りがただよっている。

平凡なことだが「もうとしじやきに」ということばをししば聞く。自身に老化の暗示をしているようなものだ。今でも、年令を云うのに、干支（えと）で現わしているのは、きれいでもあるし、老化防止に役立つか。せめて、としは数え年でなく、満年令で言う方が正しくもあるし、若返りの自己暗示になると思う。

妻におくれ又も迎ふる春の土に木を植ゑ花を育て我や何を待つ

妻のなきあとにのこりておもふかなひとりの命まもらむ

強めてあげながら、

「大悲の親さんのお膝元、お浄土というところは、死んでからゆくんじゃないんです。今直ぐ、ここから往くんです。」

と、声を張り上げると、やっと聴き耳たてて、少し表情がほころびる。更に続けて

「長患いはつらいにちがいないです。けど、あなたが今いうとるのは、病気がつらさの愚痴というものです。そりや地獄です。」

お浄土へ参れるか地獄へ行くかは、今から道が分れとるんです。早う大悲の親さんのお膝元へゆきたいのなんの、こないだは、こないだで、早う如来さんの所へ行ける注射を下さいのなんのと、そんな愚痴をこぼす人間が、いとして、いとしてたまらんのが大悲の親さんです。如来さんです。お浄土へはお念仏して、如来様のお慈悲をよるこふと、そのとき直ぐ間違ひなくお浄土に生れる身に定まるのだと聞いとります。

煩惱具足のこのわたしがいとしゅうてたまらぬ、そのお慈悲を頂くことがだいじです」

と、答えたことだった。（〇〇は、セイサンは、清算でなく精算のつもりで言つたらしい）

ところがその次のとき、

孤り

前の歌と同様、最近の歌誌からの抜粋である。

長生きをして、ますます健康な人は、男女の別なく、神か仏菩薩のような顔すがたをしている。何らかの信仰に生きている人は、神なり、仏なりと、「同行二人」である。

その意で『長寿は宗教である』とも言えそうである。

一九七〇、一五、一谷公民館発行
「いちのたに」 敬老特集号より。

二、浄土への道

もうだいぶん前のことである。私が往診している患者さんの一人に、右半身不随で床ずれさえできて、ねたぎりの老寡婦があった。

ある日、哀願するような表情で

「先生、こんなこというて、なんじやけど、〇〇がーおばあさんの病気は自分で病みだしたんじゃないから、自分で清算したらえーいうんです。」

早う大悲の親さんのお膝元へゆけたらえー思うけど、（顔がしかむ）自分で、よう処置せんし、先生、死んだら如来さんの所に行けるでしような？」

と言葉きれぎれ、泣き入ってしまう。

「それはちがいます」

と、大声を出しても聞きとれぬらしい。補聴器の感度を

「こないだ先生がおっしゃったの、私のあんじんと違うような。先生は、死んで行くところでないと言いましたな？」

と問いかける。

「いや、わたしは、お浄土は死んでから行くんじゃないと云うただけです」

といいつつ、傍の息子さんの方へも向きながら、更に「俗に〃死んで都はない〃というでしょうが！私はこのあいだ帰ると、お聖教を開けてたしかめたんです。

極楽はたのしむと聞いてまいらんと願ひもとむる人は仏にならず、弥陀たのむ人は仏になると、蓮如上人がおっしゃっているんです。……」

と語りつづけたことだった。

光照寺発行「ひかり誌」より

（編者註）

善導大師和讃に

○濁悪世のわれらこそ金剛の信心ばかりにて

ながく生死をすてはてて 自然の浄土にいたるなれ

○金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ

弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける

とある。弥陀仏のおまことを聞いて、弥陀たのむ人は、

この世にあるまんま、弥陀仏の大慈大悲のみ心に撰護せら

れて、二度と生死のまよいに沈むことのない身にさせていた
ただくのである。

近角先生は、親心のまことにめざめた囚人にたとえられた。その人は身体は刑期が満ちるまでは帰れないが、心はすでに親のふところに帰っていて、いよいよ刑期をすますや否や、直ちに親のもとに帰るのと同じ趣きがあると、いつも語られた。

きりぎりすと蟻

登張竹風訳

夏中を、歌いくらしてキリギリス

一文なしのスツテンテン

冬の木枯身にしみて ミミズも蠅もただ一匹

食えぬあわれさ弱り果て

頼む／＼と御隣家の蟻公が家へやって来た

『飯が食えねえ お助けを 粒がなくては生きられねえ
花の咲く頃春までだ』

元金も利息もうちそろえ 収穫時の八月に

見事に返すウソでねえ』

貸すのはいやな蟻旦那、これが、旦那の玉に瑕(きず)

『暑い時節に何をした』

借主(かりて)に蟻公、こう云った。

『風も夜ざりも ぶらついて』

歌ってばっかり 面目ねえ』

『歌ってばかり はあそうか
それでは一つ踊んなせえ』

(ラフオンテーヌ物語)

鳥と狐

鳥さん、木の上で、チーズをば 嘴に。

狐さん、香に迷い、鳥の君に云うよりは

『今日は、鳥君、様子が好いぜ、綺麗だぜ。』

君の歌、君の羽根、全くもって、好一對。

無類だね、この森で！』

云われて鳥、無我夢中美しい声を聴かそうと

嘴あけたで、餌が落ちた。

横取りをした狐公。鳥に向いて云うことにや

『聴けよ、君。おべっかは聴く人の

脛をかじると承知せよ。』

教え賃にこのチーズ、安価いもんだよ、本当に』

恥じ入った鳥さん。またこんな目に会うまいと

誓ったけれどおそかった。

ささやかな体験を通してわが信を語る

一、一般的信頼感について

われわれの日常生活において、お互いに信頼感がなかったらどうであろうか。このことはあまりに普通の事柄であるだけに、案外無視されているようである。しかし、もしこの信頼感がなかったら、我々は日常生活を送ることはできない。毎日の食事にしても、職場への往來にしても、また家庭や職場、あるいは未知のところへの旅行など、いろいろな環境に対処して、我々が平気でいられるのは、この信頼感が基礎にあればこそである。

私は少年時代によく祖母から「人を見たら盗人と思え、馬を見たら蹴ると思え」ということを聞かされた。これは田舎の純朴さにくらべて大都會では、いわゆる「生き馬の目を抜く」ということがいわれているように油断ができないことを教えたものだと思う。たしかに田舎のせまい地域では、いわば大家族の關係にあるような親密感があって「隣はなにをする人ぞ」というような疎隔感はない。併しだからと云って都會の人達は皆悪人で、四六時中警戒していなければいけないかというに、現実には決してそうでない。

松本解雄

い、場合によっては田舎には見られない親切心に接することもある。事実私など東北の片田舎から関西の大都會に生活することになったが、別段周囲の人たちに対して気をつかわなくても結構楽しく過してきた。もちろん「ところ変われば品変わる」といわれるように、その地方々々の風俗習慣など相当異ったものがあり、慣れるまでにはともすればとまどうこともないではないが、このように日常生活においては、以上のように我々は信頼感のうえに立って、それぞれの生活を営んでいることはたしかである。ところが宗教という次元の異なった世界ではどうであろうか。

二、宗教の信について

いずれの宗教も「信」がその中核をなしていることは云うまでもない。そこでこの問題を仏教に限って、私は以下すこし述べてみたいと思う。

仏教では、その宗の如何を問わず、究極の目標は成仏にある。そしてそれを実現する方法として、いわゆる自力聖道門と他力淨土門との二つあることは周知の通りである。いまこの信を論ずるにあたって、自力他力ともに「信をも

って能入となす」といわれるように、仏、法、僧の三宝に對する信は絶対であるが、とくに浄土教についてこれをみるならば、現代において大きな問題が介在しているようである。

自力道においては、果たして所期の目標、即ち成仏を實現しうるか否かは別としても、それに向かって進んで行くということについては、さして抵抗を覚えなないのが普通である。というのは、人は誰でも、よくなりたいたいという願いは大なり小なり持っている、つまり理想を抱いて前進しようとしている。ただ現実においては思いがけない障害に遇って途中で挫折したり、あるいは悪友に誘われて墮落の淵に落ち込んだり、またいろいろの疑問ができてきて虚無的になったりはあるが、ともかくその出発点においては、一応ゴールに向かう姿勢をとるのが普通である。このような意味において、自力聖道門の教えに對しては事の成る成らぬは別として方向そのものとしては、何人も疑問をさしはさむ余地はない。

ところが、その道は「難行の陸路」にたとえられるように、苦難に満ちた道で、前進どころか、逆に一步を踏みだしたとたんに、自己の罪業の深さに気づかされ、その無力に悲泣せざるをえなくなる。いわゆる「罪業深重、煩惱熾盛」の我等には到底望みえないものとなってくる。

ろが十五歳の時、村の小学校二年のときであった。東北では珍しい秋晴れの読いた日、健康であった父が、中耳炎から急性脳膜炎を起こし、僅か四、五日病床にあってただけで最後は見るにしのびないような苦しみをしながら息絶えてしまった。時に父は四十七歳であった。

それからの私は十年間というものは、全く灰色の日々を送らねばならなかった。具体的なことを記せば一編の身辺小説にでもなるだろうと思われるが、紙数の制限もあり、それよりも今の私としては、血で血を洗うような家庭内のトラブルを語る勇気をもっていないと云った方が本音かもしれない……それは省略するが、ともかく私の求道生活はそこから始まったといってもよい。

私はそのような環境におったので、真宗教義の概略や、親鸞聖人の教えの要点は、父や叔父や、或は他の説教者から聞いて「歎異抄」なども読んでりして、知的には一応知っていた。しかしどうしても合点がいかない点は、政悔文にある「難行難修自力のころをふりすてて一心一向に」というところであった。人は大善大行はできなくとも、貧者の一灯というように、小善小行ができるのではないか。何ゆえにそのようなことをすててしまわなければいけないのか。このところがどうしても引っかけかかって「弥陀の誓願不思議にたすられまいらせて」というように素直に受け

そこでもう一つの道、他力浄土門の教えは「水道の楽しさ」にたとえられているように、仏の本願力に乗托して往かしまれるのであるから、悪人も愚人もおしなべて目標に達しうるのであるが、ここに一大難関が横たわっている、前に現代において大きな問題と指摘したのはこのところである。

科学の洗礼を受けた現代人にとっては、合理性ということは金科玉条で、理論的に筋が通っており、かつ実証されるならば、否応なしに納得される。特に世間の経験が浅く科学を過信する者にとっては、それは至極当然のことでもある。然し、我々が宗教の前に立った時、これは誰でも云うことであるが、人間の真相をはっきり知ることが先決問題であると思う。おのれの何者であるか、或いはどちらへ向かって立っているかがはっきり解らないで、どうして理想へ向かって前進することができ得るであろうか。スタートラインに並んだ走者は、おのれの力と技とを知り、全力を傾けてゴールへ向かって突進する。自分の力も技も知らずに単に抽象的に理想を目ざすといったところで、これは全く雲をつかむようなもので問題にならないのである。

私はここで自分のささやかな体験を語ることにする。

私は東北の真宗寺院の四男として生まれ、少年時代は貧しいながら平穩無事な日暮らしをすることができた。とこ

とることができなかつた。今から思いおこせば、まことに慚愧の至りでありますが、法然上人のお歌「さえられぬ光もあるをおしなべてへだてがおなるあさかすみかな」の朝がすみで私はあったのだと、十年の求道の旅を経て、あい難き善知識にありことができて、「難中の難これに過ぎたるはなし」として頂いたのは、おのれの邪見驕慢であったことに気づかせて頂いた。それから早くも四十年の歳月を経過し、細々ながら「念仏申され」る身にさせて頂いている。まことに「たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」である。

以上私は、ささやかな信の旅について告白したのであるが、この体験を通して云いうることは、現代においての信仰生活は何と云ってもその第一歩は、自己を掘り下げることによって人間の真相を身をもって知ることである。もし頭の中だけで考えてみても、私の犯したような過ちを繰り返すことになるだけである。邪見驕慢の自己がわかることが先決である。そしてそのためには、あくまで謙虚に自己を掘り下げることである。ニイチエのことばに「おのれの立ってるところを深く掘れ、さすれば必ずよき泉あらん」とおりである。

三、信仰生活について

最後に私は、信仰生活についての従来とすれば陥り易い点について述べよう。特に浄土教についての味方易

いか、解釈といふかについて、何か誤っているのではないかと思われる点である。それは、お説教などでは、しきりに未来往生を強調し、この世では苦しくとも未来は結構な浄土へ参らせて頂くのだから、しばらくの辛抱である。というような、何か心理的な一種の催眠状態に追いやって、一時的な恍惚状態を実現させているのではないかと思われふしが多々ある。だからお説教の席では、感激の涙を流してしきりに念仏するが、お寺の門を一步踏み出すと、もう念仏がどこへいったやら、というようなのがいわゆる信者のなかに多いのではないか。私は数少ないが、本当に信に徹底し、教養こそ浅いが、深い信生活に終始して来た幾人かの人たちを知っている。そうした人達は決して未来だけの、いわば幻を描いて満足しているのではなく、現実の生活のうちに、如来の救いを実感として受け取り、日々を感謝のうちに過している。勿論、常時踊躍歡喜のおもいに住しているわけではない、時には愚痴をこぼしたり、腹を立てたりもする。しかし愚痴のこぼしきり、腹の立て放しではない。それを契機として「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と、いよいよ本願のかたじけなさに気づかせてもらうのである。池山栄吉先生のいわゆる「念仏の自動作用」とでもいうのであろうか。自からこのれのみにくさに触れることによって、いつも如来の本願

において正定聚の数に入らしめられ、無慚無愧のこの身でありながら、弥陀廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまう——の世界が顕現するのである。

この辺の消息は、最初に述べたように、合理性のうえから対象理論的に考えたのでは、到底理解納得することはできないのである。

私は今日、最も残念に思い、かつ自己の無力を痛感せしめられるのは、せつかくこのようなすぐれた教えが存在しているのに、何か足踏み状態に陥って一般化しないことである。その点について、その最大の原因は真の意味における信の欠如にあることを、かつて指摘した。そのことは誤りないと思うし、「自信教人信」こそが、大法流布の根本であると確信するのであるが、理論的に説明しただけでは到底現代の青年たちに受け入れてもらうことは至難である。

しかし一方、新興宗教などでは若い層に向かって教線を拡大し、教団の若さを発散し、それだけに大きな魅力を感じせしめているようであるが、古くして常に新しく、深く、そしてしかも易い親鸞聖人の教えが何ゆえ足踏み状態におかれているか、私なりに教義の在り方について、数年来乏しき頭脳をしばって積みあげつつある。いずれまとめたうえで発表の機会もあることと思うが、今回は問題を残したまま

に立ちかえらしめられるのである。そこに私の言いたいことは、聖人の教えは、決して未来主義でないということである。成仏を現世においてではなく未来においてあることは、それなりに深い意味はある。それは現実の自己を見つめた時、そして一般的にいうならば、我々が肉体的制約を受けている限り、成仏を未来におくことは「真実」ということから云っても当然そうでなければならぬ。唯ここで注意しなければならぬことは、救いは未来にあるのではなくして、飽迄現実のものであるということである。といって私は現実において、さとりを開いたなどということを主張するものではない。われわれは依然として煩惱具足の凡夫であり、この世は火宅無常の世界である。否、如来の光に照らされることによって、いままでは気づかなかった自己の姿が次第に明らかになり、現に常没流転のこの身であることが知らされるのである。

如来の真実に触れて、私の穢悪が知らされ、そこにいわゆる信の旅路を歩ませてもらおうわけであるが、この相矛盾したものが、同時に成り立つところに信の妙境がある。親鸞聖人のものされた数々の聖教をひもとくとき、いかにもいかにもとうなずかされるのである。真実の心ありがたく清浄の心もさらさない、虚仮不実のわが身であるが、それなるがゆえに、このたび如来の慈光に攝取されて、現生に

筆を擱くことにする。ひとえに同信の方々のご指導をのぞんでやまない。

「仏灯をかかげる」より転載
〔宗教〕四十三年十月号

住田智見師辭世

同一念仏無別道故

念仏にてまいりたまひし父母の

御あとをふみて我はゆくなり

一生雖尺希望不尽

老いぬれど娑婆執着の凡愚かな

七十有一なから世の中

戊寅梅雨病中

閑 凡 夫 智 見

(昭和十三年六月十五日)

晩年の池山先生を憶う

花田正夫

猫の額ほどの庭にも萩が咲いて、先生の忌月の近づいたことを告げてくれます。ことに今年、私も先生の亡くなられた六十七を迎えまして、先生が昭和十一年秋の急性腎臓炎で生死の境をどうにか超えられて一時恢復されました後、十三年十一月八日、遂に御往生なさるまでの極く晩年のことがしきりにしのばれますまゝに、想出を誌し、最後の身をもって示されたおしえをこうむりましょう。

先生の最初の大病がようやく順調にむかわれたとお聞きして、洛北蓮華谷の御宅にうかがいました時、

「京阪神のお見舞客とはまた面会をこわっておりますが、名古屋から来て下さったので、一寸だけお会いしたいと申しております」

と、奥様に案内せられて、病室に入りますと「もつと近くに」とまねかれるままに病床にお寄りしましたら、

「今度は本当に駄目かと思つたが、この分なら君たちともまた会えるようになるらしい、……」

と云われるなり、突然先生が慟哭されたので、私はお病氣

想えば、先生があつた狂乱のお姿を示されたのも、私が罪障が重いのを知られての所為（しよい）でありましたと気づき、狂乱の所為多き大悲を一入仰いでおります。

次回にお伺いしました時は、大分お元氣になられて、椅子に寄っておられました。その時、何のきっかけか思い出せませんが、窓の外を眺められながら、ポツリと、

「親鸞におきてはただ念仏してのおこころを、日本中を走り廻つても聞いて貰いたい……」

と、つぶやかれました。私はすかさず、

「先生がお丈夫になられてそう出来るようになられたら、お靴を持ってお伴させて頂きます」

と、申しました。

この言葉も私には驚きでありました。先生は「親鸞弟子一人も持たず候」をそのまゝに体認していられて、何時も後ろ向き姿の御教化をうけておりましたが、先生の上に輝く大悲行をそこにまぎ／＼と仰ぎました。もとよりそれは、名月が太陽の光をうけて照り返すのと同様に、先生の上、にわれならぬわれを仰いだのであります。

その頃の或日、先生にも御苦勞があらましようか、と愚問を出しましたら、

「あるさ、どうしたら、ただ念仏の、こころがわかつて貰えるというひとつ……」

に障りはしないかと思ひ、看護の方々も、その声に驚いて走せ寄られました程で、そのまま次室に退きました。

平素、悠々としていられる先生の、思いもかけぬ慟哭にあい、私の心の奥に謎として深い感銘を受けておりました。さて今にして思ひますのに、涅槃経に、釈尊が入滅を前にされて

「阿闍世のために涅槃に入らず」

と仰言つたお心の片鱗をそこに拝するのであります。釈尊が五逆の大罪を悔いて懊惱苦悶を続けている阿闍世王をみそなわしての大悲のほとほしりであります。仏弟子方はこれを聞いて、「私共がどうぞ一日でも長くいて下さるよう度々お願い申したとき、何のお答えもなかったのに、どうして阿闍世一人のためにかく仰せられるのでしょうか」とお尋ねすると、世尊は、「お前達はすでに道を求めて修行しているから、如来の常住することを知っているが、悪逆の阿闍世はここで別れると永遠に会うことが出来ないと思つている、この煩惱に狂うた者をどうして捨て、涅槃に入ることが出来ようか」とお答えになりました。

と、スラ／＼とお答え下さったことがあります。先生の身辺にふれるあらゆるものの上に、尽十方の無碍光を仰がれて、私共に伝えて下さいました。端唄秋の夜、歌謡曲青い芒、船頭可愛や、並木の雨、城が島の雨、天童小唄、大阪音頭等々をひかれて、念仏の味わいを領けて下さつたり、或は愛犬の三味境やら、動物園での秋田犬との応答、犬が子供を救い上げた話、タン新聞にあつた戦争で主人を見失つた犬の話、またカナリヤの呼び声にも、深い信味を感じられ、お伺いする毎にその味わいをおもらし下さいました。聖典では歎異抄を中心に、教行信証や和讃、それに他山の石として、ニイチエの超人、ゲエテのファーストや美しい魂の告白、等々を引かれました。

次に忘れ得ないことは、京大の学友会館で親鸞会を催した時、病後の先生は、御講話は頂けませんでしたが、四国の篤信者の鎌田さんのお骨折りで、先生筆の「親鸞におきてはただ念仏して」の木版刷りの半切を、先生御自ら参会の人々にお渡し下されたお姿であります。羽織、袴のお服装で、お念仏の中から丁寧にお頒ち下さつた先生の御心中如何ばかりでありましたことか。

六十余年の人生を過ぎられて御身はすでに病身、興亡、浮沈、悲喜こもごものはてしない生死海に唯念仏一つ、こ

の本願の思召し、聖人の一期一会の御勸化、これをどうか心に刻み、やがて内から自然に同心するようになり、との切なる願いにあふれておられましたことでありましょう。

○
最後には、友子奥様が記録して下さいました、先生の最後の御病中の出来ごとを抄出いたします。

十月二十四日、
先生がすでに死を予知され、その期の近づいたことを自覚せられて、

「ことによると今夜だめになるかも知れないからお前は寝ないでついておいで」

と、真剣な中にも余裕をもたれながら告げられると、奥様が気が転倒せんばかりに、

「ほんとうにそんな気がなさいますか、おえらいでしようがもう一度元氣を出して下さい、一生涯お寝みになつたままでも……」

と一生懸命に哀願され、先生は

「生きたくても命がないじやしようがない……南無阿弥陀仏……可哀想にとろ／＼お前も一人になるんだな……しかしこれで別れきりじやないんだよ、そのうちまたあえるからな……」

とじつと奥様の顔をみつめ淋しく微笑されました。すると

と、にこ／＼微笑んで私の顔を撫でて下さいました。

「父さんともう離れることはない、これから念仏を味わって行けばいゝんだ」

とも仰言して下さいました。……」

○
奥様が先生に向って語りかけるかたちで認められた手記に、(二十八日は奥様は出校で留守)

十月二十九日、

愛子がお念仏申すようになったいきさつを聞き、如来の御恩に心から感謝いたしました。

やがて、愛子が

「きのうお父さんが便箋と万年筆とを持って来いと仰言るので行って行くと、御自分の言うことを書きとっておけと仰言って、これを私にお書きとらせなされたの、そしてこちらはお父さんが御自分でお書きなされたの」と云って、お言葉と絶筆を見せてくれました。

お言葉は「南無阿弥陀仏を言え」

お絶筆は「南無阿弥陀仏アイユ」

とありました。あゝ生死の境に彷徨しながら、なお後に残る薄倅な娘が気にかかり、どうでもこうでもこの救いの糸だけは握らせておかねばと、お念仏を説きつづけ、この世の置土産にまで書き残して下さいましたこのお念仏、これこそ

我慢に我慢を重ねていた奥様の涙の堰が切れて

「一人で残りたくありません、おあいする日までが辛うございます……」

と取り乱してすがりつかれると、その一言半句も疎かにせられず聞きとって、やがてにっこりとして

「しつかり念仏するんだ、しつかり念仏するんだ、どこまでも念仏でつながっているんだよ、いいか、南無阿弥陀仏」

と諄々とお念仏を説かれました。そして

「可哀想に、お前も業人だな、念仏を忘れるな」

と何時も涙と微笑をもって語られたことが奥様の身に強くひびきました。

十月二十八日。

末娘のあい子さまの手記は次のようであります。

「お父様の臨終十日程前、私の顔をじつと見つめて、

「父さんは今度はもう駄目だから一緒に念仏しよう」と仰言いました。私は、お念仏を云わなければお父様と永久に離れて仕舞わなければならないと思って、必死の思いで、南無阿弥陀仏とお父様について云いました。すると苦しい中から、

「あい子、もう思い残すことはない、これで安心だ、父さんも喜ぶよ、今の母さんも、亡くなった母さんもね」

あなたの真実の願であり、おいのちの姿でありました。

十月三十日

この日、村上らく(長女)が映坊を連れ、川西信也(四男)と共に見舞に来てくれました。丁度その時お床の上に坐っていらっしやいましたが「お父さんどうです」と尋ねてくれる二人の顔を見るなり、

「子供をあちらへやって」と命ぜられ、

「父さんはもう今度はだめだ、あゝ可哀想に、念仏をし

ておくれ」
と泣き崩れる二人の手を次々と握り、繰り返し／＼切願せられるのでありました。親の願はただこれ一つ、可愛い娘や息子を永劫の闇に迷わしたくない、一日も早く真実のいのちを得させて、先々は光明の浄土で永遠にこの父さんと手をつないでゆこうとの三世の御親そのままのお心であったのです。

御容態は一進一退、衰弱は日々に加わります。食欲不振は益々つのるばかり、寝かせては起し、起しては寝かせ、せめて食事だけはお寝みのまゝ進めようとお口に入れても咽喉を越さぬ悲しさ「あゝ私が代れたら」と幾度涙をかみしめたことでしょう。それなのに、その苦しい中にも、家族の者がお側によりさえすれば

「あゝあゝ可哀想に、南無阿弥陀仏」と絶えずお慈悲を御廻向下さいました。

十月三十一日、

言葉の自由が漸次失われてゆく上に、身体の自由も視力も失われかけてきました。

御就寝前、食間の薬と水薬を水呑に傾けていますと、静かにお念仏されました。やがてお顔をほころばせて、何かささやかれたい様子なので、お口元に耳を寄せますと、とぎれ／＼ながら、

「何も残るものはない、何も残るものはない

ただ念仏だけが残ってくれる

ただ念仏だけが残ってくれる

偉いこったよ、有り難いこったよ」

とお声はそのまま消えました。……いよ／＼人生の最後きたよとたのむ何一つ残らぬ身に、たのまるるただ念仏ばかりが厳然と残って下さる……何という尊くもたのしいことでありましょうか。

十一月二日、

此の日もリングル注射。朝からほとんど言葉が失われてしまったのに、お念仏だけは不思議にも朗々とお口から洩れるのでありました。

十一月三日、

に、短刀直入に、「ただ念仏して」の慈悲の念仏を御廻向下ったお心に、何時も胸うたれております。

念仏成仏の白道に、自信即教人信、自利即他利のめぐみが自然にひらけてまいります。時に自利が表になり、他利が裏になることがあり、又逆に教人信が前に出て自信がうちにひそめられることがあります。然しそれは一つのもの表裏で、別のものではありません。先生が生涯の終りが近づかれるにつけて、他利と教人信があらわれ、念仏成仏の素懐を遂げられました。

それにつけましても、馬齢をいたずらに重ねております私、あと幾年のいのちか知る由もありませんが、御晩年の先生を想い、本願念仏の一道を有縁の方々と共に一筋にたどらせて頂きたいものと願っており、私の余生に、このこと一つを身をもってお示しただきましたことは、大きな指針となり、燃炬となって私の行く手を常に照らして下さいのであります。

昭和四十五年十月八日、稿了

朝から衰弱が加わり、容態は悪化しました。同じO型の愛子の血三〇グラム輸血、大分落ち着かれたので渡辺先生、川畑先生は夕刻お引きとり下さいましたが、その夜十時頃から一時頃までウト／＼とされたきりで意識は全く冴え、睡眠剤の効目もなく、終夜お念仏の御相続でありました。

十一月七日、

寝台の正面に掛けてある御自筆の「一心正念直来」の軸をじっと見詰め、やがてすぐ左側の壁に目を移され何事かしきりにお心の表示がありましたので、それとお察しして「親鸞におきてはただ念仏して」の軸をとり出して掛けますと、「そうだよ」とばかり、うなずいて、いかにも満足そうにしばらく見入って、やがて高らかにお念仏されました。すでに一切の言葉の失われてしまった今日、なおお念仏ばかりは不思議に申されました。

十一月八日、

午後三時十九分、念仏の息絶えおわれました。

以上は呼子鳥（先生の一周忌に出版された追想録）にのつた友子奥様の手記の抄出であります。ここに、死の近きを知られた先生が、御子様や、奥様、そして有縁の人々

浅原才市のうた

ゆうもゆわんもなく

おやが死ねばよいと

おもいました

なして わしがおやは

死んであろうかと

おもいました

この悪業 大罪人が

いままで ようこれで 今日まで

大地がさけんこと

おりましたこと

○

わしのちちおや 八十四才

往生しました お浄土さまに

わしのはおや 八十三で

往生しました お浄土さまに

わしもいきます やがてのほどに

親子三人 もろともに

衆生さいどの 身とはなる

ごおんうれしや

なむあみだぶつ

あとがき

草木もみのりを終えて、初冬を迎え
ました。

人ならば八十路の坂をこえぬらし梢まば
らにのこるもみち葉

この池山先生の嵐山での御述懐は、信友
の北岡さんの御尊父の心をゆるがせ、やが
て聞法の人と転じる機縁となりました。

心して見れば、あらゆるものが大法を讃え
指差しているのに驚かされるこの頃であり
ます。

十二月の近角先生の御忌月を前に、先生
に御縁の深い柳瀬様と和才様からお原稿を
頂きましたことはありがたいことでありま
した。

又、私の大高時代からの信友玉尾さんが
郷里の一の谷で医療に専念されながらの随
想と、京大時代からの法友松本さんから
『法灯をかかげる』の近著を頂きましたの
で、その中からこの一篇をいただきました。
松本さんは愛媛大学を先年停年退官せられ
目下は高松市の女子短大に出講していられ
ます。最終一貫して「青年学徒の求道」
ということに腐心して下さっています。
西欧の聖者は「地の塩になれ」と申しまし
たが、玉尾さんは医療の道に、松本さんは
教育の場で、地の塩の仕事をおのずから成
りまして下さっていることを、常に畏敬して
おります。

仏灯をかかげる

親鸞聖人に親炙して 松本 解雄

目次 仏灯をかかげる。随感。

宗教と道徳について。真実のみ教え。聖徳
太子小論。念仏のたのもしき。横田先生を
憶う。現代社会における仏教の在り方。

親鸞の僧職者の在り方。ささやかな体験
を道してわが信を語る。親鸞への道。

私共の恩師、羽溪了諦博士の序に、

松本解雄教授は京大文学部に在学中、私
の司幸していた知四明寮で三年間寝食を
ともにした親しい間柄であります。資性は温
厚篤実で、しかも真摯な求道心に燃え、京
大学生を中心とした京都学生親鸞会に参加
し、ひたすら祖聖の正信念仏を体解するこ
とに精進された結果、遂に無碍の一道を歩
む熱誠な念仏者となりました。……………
現下わが国は高度成長を遂げて、物質面
では素晴らしい繁栄ぶりをしていくけれど
、精神面では退廃の傾向が著しく、物質上
の公害よりも怖るべきひずみを呈しており
ます。人間は機械の奴隷と化して自主性を
失い、欲求不満から絶望に陥って内向性の
青少年は自殺、外向性の者は暴力を振うた
至っている。この秋に本書の刊行された
ことは時宜を得た慶事というべきでありま
す。特に青年諸君の精読を切望して止まら
せん。と推賞していられます。

申込所 香川県木田郡牟礼町大字大町玉
藻台一六 松本解雄

実費頒布 送料共 二百円

御案内

○毎月、第一、二、三日曜講話。
午後一時半。

○毎月二十四日、午前午后、
教西寺法話会。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区既上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区既上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七